





燈謎——漢字文化圈文字遊戲の諸相すがた

## 目次

### 序章 謎解きに集う人々

- 一 「燈謎」とは燈籠に掲げるなどなのかな? 7
- 二 燈謎研究の現状と問題点 17

### 第一章 演じられた謎かけ

- 一 ライブ・エンターテインメントとしての「商謎」 25
- 二 筆記小説に見られる商謎の類例 33
- 三 本章のまとめ 38

### 第二章 カテゴライズされる謎

- 一 明末の燈謎攻略書 43
- 二 九種の日用類書 48
- 三 燈謎の位置付けと分類 58
- 四 本章のまとめ 73

### 第三章 章回小説に織り込まれた燈謎

- 一 明末清初の世情小説・西周生『醒世姻縁伝』 78

二	『紅樓夢』とその続書	82
三	才学小説・李汝珍『鏡花縁』	94
四	才子佳人・狎邪小説	114
五	小説革命以降の章回小説	123
六	本章のまとめ	129
第四章	謎作りに興じた人々	
一	燈謎に積もる話	137
二	近代ジャーナリズムの流れに乗って	148
三	中国民俗学との齟齬	159
四	本章のまとめ	163
第五章	文化的郷愁とともに	
一	近代台湾における燈謎活動	171
1	日本統治時代以前（二六六一―二八九五）	173
2	日本統治時代（二八九五―一九四五）	175
二	戦後の文化政策と謎社の復興	181
1	戦後の「中国化」（二九四五―二九六五）	181
2	中華文化復興運動期（二九六六―一九七六）	186

3	文化建設から「本土化」へ（一九七七—現在）	191
三	本章のまとめ	196

## 第六章 引き継がれた燈火

一	戦後大陸における燈謎活動	204
1	謎社の分布と種類	205
2	一九九〇年代大陸謎人の基本状況	206
3	全国的な刊行物と組織	208
二	断層を乗り越えて	210
1	復活と統制（戦後から文革期まで）	210
2	蘇生（文革収束後から八〇年代まで）	217
3	組織の移転と競技化ブーム（九〇年代以降）	220
三	本章のまとめ	222

## 終章 境界線上の〈戯れ〉 230

附章	平城宮跡出土組み合わせ文字の水脈をたどる	
一	文字遊戯の水脈	241
二	呪符説の再考	244

索引	296		
参考文献	275		
初出一覧	274		
あとがき	270		
		三	文字遊戯のシルクロード
		四	推論と仮説
			264
			254

## 凡例

- ・本書では、必要に応じて一部旧字体も使用するが、読みやすさを考慮して、引用文中の漢字は原則として新字体を使用し、歴史的仮名遣いは現代のものに、読点やルビも追加した。Unicode 外の文字は、原則として普通の活字に改めた。文書の破損等で判読が困難な場合は、字数を推定し□□のように示した。推測した文字は「」に入れた。
- ・訳文は、既訳があるものは原文を省略し、既訳を引用または一部を変更した。それ以外は筆者による口語訳であり、漢文体のものは、必要に応じて原文を併記した。併記する原文は日本語の記号（約物）に改めた。
- ・明末日用類書所載燈謎の実例は、特設サイト (<https://bungaku-report.com/toumei.html>) にて全文公開の副読本『明末日用類書燈謎選集』（校訂・訳註 呉修喆）を参照されたい。
- ・〔 〕 は訳者によるもので、原文を併記する場合や、語義を明確化するために注記・注釈を施す際に用いた。
- ・同一の著者から連続して引用する場合、「同」と表記した。
- ・傍点での強調は筆者による。
- ・出典のない画像は、筆者が撮影したものである。

## 序章 謎解きに集う人々

### 一 「燈謎」とは燈籠に掲げるなぞなぞなのか？

春節時期に中国へ旅行しに行くと、もしかしたら、どこかでこのような光景を見たことがないだろうか。祝祭の色に染められた繁華街の一角、あるいは公園の空き地などに、「燈謎会」と称されるイベントの会場が設けられていて、覗いてみるとけっこうな人だかりができています。なにになに、と近づいてみると、燈籠やら柵やらに色とりどりの紙が飾り付けられていて、その上に何か文字が墨書されている。その文字というのは、あるいはこのようなものかもしれない。

孔融曰（外国地名<sup>1</sup>）

どういう意味だ？　ますます見当がつかない。そういえば「燈謎」と書いてあったな。もしかしてこれはなぞなぞなのか、と気がつく。周りを見渡せば、受付みたいなどころがある。嬉々とした面持ちの客が主催者らしき人と会話すると、主催者は手元のメモ帳を確認し頷き、台の下から景品を取り出して相手に渡した。景品というのはべつに豪華なものではない。子どもならばお菓子やおもちや、大人には歯磨き粉やタオルなどの日用小物が相場らしい。なるほど、まるでクイズ番組の街頭版みたいで、知的な遊びで楽しそうだ。

〈なぞなぞ〉であることはわかったが、これはどうやって解くのかと、気になる。簡単にルールを説明してみよう。先に挙げた例でいえば、「孔融曰」は題にあたる部分で、専門用語としては「謎面」という。括弧の中の「外国地名一」は「謎目」といい、すなわち謎の種目ということで、答えの範囲を示している。通常ではこのように、「一」か「二」と、答えとなる単語の数も明記されるのだ。ちなみに、答えは「謎底」という。それにしても、この謎面はとても短い。謎目と合わせても八文字しかない。答えを導くすべてのヒントがこの八文字に集約されている。ならば、情報を増やさなければ解けない、というのは明白なことである。

この謎を解くための切り口はどこにあるのだろうか。最初に目にとまるのは、やはり「孔融」という人名である。では、孔融はどういう人物なのか、答えはおそらくそこに関連している。孔融（一五三―二〇八）は後漢末期の政治家かつ儒学者であり、字を「文举」という。孔融といえば、中国の人ならまず思い出すのが「孔融讓梨」という故事成語であろう。伝統的な初学書である『三字経』では「融四歳、能讓梨」との一文がある。わずか四歳で自分より年長の者を敬い、幼き者を思いやるという美德を備えた賢者として、この物語は今日においても子供たちの啓蒙教育に使われている。しかし、残念ながら今回の謎はその逸話となんの関係もない。もつと単純なところからの着想が要請される。端的にいえば、孔融の別名さえ知っていれば、すぐ解けるはずである。六年間北海国の相を勤めたことから、孔融は「孔北海」という別名をもつ。ここまでわかれば後は簡単である。「曰」の字義は「言う・述べる」であるから、ここは同じ意味をもつ別の文字を連想すればいい。つまり、「言語道断」の「道（言う・述べる）」だ。そう、この謎の謎底はすなわち「北海道」である。

本書で扱う〈燈謎〉は基本的にこのような形式を有するものを指す。右のものを典型例としてイメージされたい。つまり、周知のなぞなぞと比べて、漢字の形・音・義（意味）を材料として利用し、謎解きに一定の教養を要求するというのが特徴である。ただ、あらかじめ断っておきたいが、本書は燈謎についてはつきりとした定義を提供す

新名詞謎最鮮新  
科学方言難煞人  
枉却身旁多夾帶  
翻来檢去没来因

イラストの上には、少々通俗的な詩が書かれており、後半の二節からは当時流行していた謎の特徴が読み取れる。



図1 「打燈謎」(『図画日報』第百八十七号、1909年)

ることを目的としているわけではない。やや弁解じみた言い方をすると、本書は、研究対象の定義のしにくさを出発点としている。明白な定義を下しにくい現状を作り出したのは何なのか、それをめぐって先人たちはどのような葛藤を抱えてきたのかを考察したものである。ゆえに、本書は燈謎そのものに対する研究というより、そのような文字遊戯に心酔し、作品を創り、燈謎で知的コミュニケーションを結成し、燈謎というものの価値を世間に大いに喧伝しようとする人々の思いを描こうとするものである。

図1に描かれているのは清末における燈謎会の様子である。主催者は自宅の入り口付近に謎の書いた紙を貼りつけた燈籠を設置し、往來の賓客はその燈籠の周りに集まって、謎解きに興じる。その傍らには、新年の挨拶を交わす人もいるようだ。

古文不熟五経荒

若係唐詩更尽忘

還是四書容易想

一猜一得喜洋洋<sup>[2]</sup>

「もつとも目新しいのは新名詞謎で、科学や方言を当てる謎は非常に難しい。本を何冊もこつそり持込んだが、いくら捲つても解けない。古文と五経はおろそかだし、唐詩もすっかり忘れたし、やはり四書のほうが考えやすく、すぐ当たるから楽しい」と書いている。ここで挙げられている新名詞、科学、方言、古文、五経、唐詩、四書はいずれも謎目である。この詩から見ると、燈謎の出題範囲は読書人が身につけているはずの知識・教養というわけだが、中でももつとも当てやすいのは四書のような儒教の基礎経典、読書人なら誰もが暗誦できるものだと示している。

ならば、「燈謎」とは、すなわち、燈籠に掲げるなどなことなのか。まず、文献からこのことばの由来に関する記述を探してみよう。たとえば、一九二五年に掲載された鈴木虎雄（二八七八―一九六三）の「支那文学に於ける語戲」<sup>[3]</sup>には「燈謎」という一節がある。しかし、鈴木によって引用された史料の中には「燈謎」ということばは直接は出てこない。

吳自牧の夢梁録に、商謎者、先以鼓兒賀之、然後聚人猜謎といひ、周密の武林旧事に、絹燈に詩や詞や汴京の諠語を翦り写して行人を戲弄することあり、都城紀勝に、來客念隱語說謎、名打謎などとあれば、燈謎は南北二宋以来の事と見えたり。<sup>[4]</sup>

とある。『夢梁録』、『武林旧事』および『都城紀勝』というものは、どれも南宋の都だった臨安（現在の杭州）の風物を記録する書籍である。このまとめの記述から、南宋時代には、謎当てゲームの参加者を集めるのに「鼓児（つづみ）」が使われたり、「絹燈」が掲げられたりしていたことがわかる。前に置かれる動詞（念「説」）は異なるものの、「隱語」と「謎」がこの類の遊びの通称として用いられていたことがわかる。

さて、「燈」の字はいつから付くようになったのか。明代に書かれた「謎」に関する記述として、劉侗（一五九三？—一六三七）・于奕正（一五九七—一六三六）の『帝京景物略』には、

〔正月〕八日から十八日に、人々が東華門外に集まり、「燈市」という。（中略）詩で物の名を隠し詠みして寺や道観の壁に掛ける習慣がある。それを「商燈」という。

八日至十八日、集東華門外、日燈市。（中略）有以詩隱物、幌於寺觀壁者、曰商燈。

とある。また、田汝成（一五〇三—一五五七）の『西湖遊覧志余』卷二十「熙朝樂事」には、

正月十五日は上元節（元宵節と同じく、旧正月の十五日）であり、その前後の五夜に燈籠が掲げられる。（中略）物好きな人たちは蔵頭詩（折句。詩の各節行頭から意味のある単語や文が取り出せる詩のこと）などを書き、人に当てさせる。それを「猜燈」という。

正月十五日為上元節、前後張燈五夜。（中略）好事者或為蔵頭詩句、任人商揣、謂之猜燈。

と書かれている。ここでは「謎」という字は使われず、「燈」の字だけで謎を指している。

そして、明末張岱（二五九七―没年不詳）の『陶庵夢憶』には、

道の交差点に棚を組み立て、大きな燈籠を一つ掛け、俗に呆燈ほうとうという。燈籠の上には四書や千家詩などの故事を元にした絵を描き、或いは燈謎を書き、人々はその周りを立って謎を当てて。

十字街搭木棚、掛大燈一、俗日呆燈、画四書千家詩故事、或写燈謎、環立猜射之。

との記述があるように、当時において、元宵節などの祝祭日には、燈籠を掛け、その近くに集まって謎当てゲームを楽しむ風習がすでに根付いていたと窺える。こうした明代都市文化の記録から、この風習が一般化し、「謎」が「燈」と結び付けられ、或いは「燈」が「謎」の代名詞として使われるようになることで、次第に「燈謎」ということが生まれたと推測できる。

このように、街頭で謎当てをする風習自体は宋代に発祥したらしい。ゆえに世間で流行していたなどなどを収録する謎集も宋代から出版されていた。ただ、残念ながら、書名の記録は確認できたものの、清代以前の謎集はほとんど散佚しており、清代以前の古い「燈謎」は、比較的まとまった形として、明末の日用類書に収録されている。

清代以降の燈謎活動は、褚人穫（一六三三―没年不詳）の『堅瓠集』や梁章鉅（二七七五―一八四九）の『歸田瑣記』、梁紹壬（二七九三―一八三四）の『兩般秋雨齋隨筆』などの筆記作品の中に記録されているほか、謎集も多く出版された。中には、費源（生没年不詳）の『玉荷隱語』のような完全に個人作品を集録した謎集もあれば、『竹西春社鈔』のような謎社（燈謎の創作者である「謎人」による結社）同人の作品集もあり、または『十五家妙契同吟集』のような書坊（出版社兼書店）が収録した多数の謎人によるオムニバス謎集もある。それらの謎集に記されている謎のほとんどは四書五経などの儒家經典、いわば科挙時代の読書人であれば、誰もがもっている伝統的教養を材料に創作された

ものである。

一九二八年に出版された錢南揚（一八九九—一九八七）の『謎史』では、清代中期以降主流の燈謎スタイルを「今体<sup>きんたい</sup>」、それ以前のを「古体<sup>こたい</sup>」と称し、「古体」から「今体」への発展について次のように述べている。

清初の謎語は、元・明の伝統を受け継ぎ、同治・光緒年以降の流れの端を開いた。たとえば、毛際可の『燈謎』、周亮工の『字觸』、黃周星の『瘦詞』および錢德蒼の『解人頤』、咄咄夫の『一夕話』に見られる謎はなお元・明の古い作風を改めていない。その他雜記に収録される謎もまた古体が多い。

清初謎語、上結元明之局、下開同光之端。若毛際可之『燈謎』、周工亮之『字觸』、黃周星之『瘦詞』、以及錢德蒼之『解人頤』、咄咄夫之『一夕話』、猶未改元明之旧也。此外、雜記所収、亦多古体。

現在の謎の文体は、元・明に創始し、清の中葉になって盛んに書かれるようになった。

今謎之体、創始元明之際、至清中葉而始盛也。<sup>10</sup>

今〔体〕謎が流行りだしてからは、古体の謎が格調の低いものとみなされ、士大夫の口からは出なくなつた。そして宋・明の謎語は民間にだけ伝承されるようになった。

自今謎盛行、視古謎為卑鄙、不復出諸士大夫之口。而宋明謎語、遂僅流传於民間。<sup>11</sup>

「古体」とは、詩や詞などの韻文形式をとる謎のことである。ただし、文体の格調がさほど高くはなく、一般的な題材の詩詞より、やや口語的で、口に出して読んだ場合でも意味が通じやすい。一方、「今体」は主に短句形式

となっており、四書五経などの典籍から原文をそのまま借用するなど、古典の知識がなければ解けないような、読書人向けに創作されたものを指す。具体的な例示と論証は第二章で行うが、実態としては、『謎史』の記述でもわかるように、この二つの作謎スタイルの間に新旧交替が起こったわけではなく、いわゆる「古体謎」も清代以降民間で受け継がれている。したがって、「古体」と「今体」をあくまで作謎スタイルを区別するための便宜上の名称として捉えたい。

やがて、清末・民国期になると、「今体」といわれる文人風格の謎は、近代新聞雑誌の発達から全面的に影響を受け、懸賞クイズとして需要と供給の両面において大きく成長した。たとえば、中国初期の新聞紙の一つである上海の日刊紙『申報』<sup>（しんぱう）</sup>は、その創刊の一八七二年から燈謎に関する記事を掲載しはじめた。「燈謎二十五則並引」という記事には、このような端書きがついている。

射覆<sup>せきふ</sup>、商燈<sup>しょうとう</sup>は文人の遊戯に属するが、腹を探り合つて智闘するには、通常とは別の知恵を要するため、誰でもすぐにできるものではない。ゆえに、古人は盛会の場において必ず燈謎を創つて雅趣を博した。申江（上海の別称）<sup>（しんか）</sup> 一带には人材が雲集しているため、まことに数多くの巧みなる文学が書かれ、互いにその美しさを競つて目を奪わんとし、いかなる珍しいものも見られる。しかし、唯一文虎<sup>ぶんこ</sup>に関しては、惜しいことに、（いい作品が）欠如している。どうして詩壇の諸君はそれを取るに足りない小技とみなし、作るに値しな思っているのか。あろうか。

射覆商燈雖属文人遊戯、而其鉤心鬪角别有慧腸、固非率爾者所能從事焉。故古人於盛会之場必製燈謎以博雅趣。惜申江一帶人文雲集、巧製良多、鬪彩爭妍、幾至無奇不有、而獨於文虎一事、竟屬闕如、豈驢壇諸君子以為彫虫小技、鄙而不屑為耶。<sup>（12）</sup>

この記事では、タイトルの「燈謎」以外に、「射覆」<sup>[14]</sup>「商燈」<sup>[15]</sup>「文虎」<sup>[16]</sup>という単語も出てくるが、どれも同じ「文人の遊戯」、すなわち燈謎を指すことばである。また、翌年に掲載された「度詞艶情四集」<sup>[17]</sup>という記事の中には、このような意見が述べられている。

度詞隱語には長い歴史がある。本来は人々の精神を啓発し、人々に考えさせることによって鑑賞に耐え得るものである。しかし、私が見た『申報』に掲載された四五十作以上ある謎は、どれも謎底を開示している。そのような載せ方では、古人の藏鈎射覆の旨に背いているのではなからうか。

夫度詞隱語由来已久、原以發人性靈耐人尋味。比見申報所載不下四五十條、皆將謎底說破、不與古人藏鈎射覆之意相刺謬乎。<sup>[16]</sup>

と、読者から謎の解答を募集し懸賞コラムにすべきだと提唱しているのだ。『申報』の編集者はその意見を受け入れ、その後、「隱語候教（燈謎クイズ）」と題されたコラムや街で開かれる「射虎会（燈謎会）」の告知などが多く掲載されるようになった。ここに清末から始まる謎ブームの一斑を窺うことができる。

右で述べたように、清末から民国期にかけて、近代ジャーナリズムの波に乗りつつ、ブーム的な発展をみせ、今なお愛好家の活動によって生き続けている漢字文化の一つに、漢字の形・音・義を利用し、文学的に書かれる謎というものがある。それぞれの時代において、このような謎はさまざまな名称で呼ばれてきたが、現代中国語で、最も広く用いられるのが「燈謎」というジャンル名である。燈謎は現代においても、大陸をはじめとする漢字文化圏の諸地域で、元宵節などの時期に民俗イベントとして行われている。図2と図3で示すように、現代の燈謎はカラフルな短冊（謎箋）に書かれ、壁に貼りつけられるか、高いところに張られたロープに吊り下げられるなどの形式を一般的にとっている。図4と図5は二〇一五年に撮った台北燈節の様子であるが、当時、台北市内の円山公園で



図 2、3 中国浙江省湖州市の燈謎場（2015年2月22日筆者撮影）



図 4、5 台北燈節の燈謎イベント（2015年3月5日筆者撮影）

は、燈謎の勝ち抜き戦を行う「燈謎擂台」と、「台湾省城隍廟」と称されるスペースでの燈謎会が行われていた。大陸においても、台湾においても、イベント用の燈謎を提供し、燈謎会を仕切るのは基本謎社である。ただ、作品のスタイルや、謎社のメンバー構成、活動場所、活動形式などにおいては、組織ごとに異なる点が多い。

ちなみに、このような「文人の遊戯」である謎を指すのに「燈謎」というジャンル名が定着するようになったのは一九八〇年代以降、比較的近年のことである。代表的な例として、一九八六年に出版された陸滋源の『中華燈謎研究』には、「燈謎と謎語の分岐点」「燈謎と謎語の区別」を説明する節がある。陸は、まず、謎を文義謎（ぶんぎめい、漢文の特性を利用した文学的な謎）と事物謎（じぶつめい、事物の性質や特徴などを述べてその名称を当てさせる比較的文学性の低い謎、いわゆる「なぞなぞ」）の二種類に分け、そこから論を展開している。明代の謎集や日用類書を読めばわかるように、もともと燈謎イベント

において用いられる謎には文義謎と事物謎の両方が含まれていた。しかし、清代以降になると、「燈謎」ということばは徐々に文義謎に限定して用いられるようになったと陸は指摘する。一方、「謎語」ということばも本来、文義謎と事物謎の両方を指すものであったが、現代においてはもっぱら事物謎を指す用語となっている。<sup>[17]</sup>『中華燈謎研究』の中では、燈謎と謎語の区別をわかりやすく説明するために、作例を挙げている。たとえば、答えが同じく「蚕」となる謎を、謎語であれば、「可愛い女の子、肉や魚は食わずに葉っぱを食べ、一日中働いて糸を紡ぐのは、人いい服をあげるためなのだ（一個姑娘真可愛、不吃葷腥吃樹叶。成天勞動紡絲線、為了別人好穿戴。）」となるのに対し、燈謎のほうは「石頭老虎」となる。<sup>[18]</sup>これは、「石」という漢字の「頭」である「一」を取り、その「一」を「老虎（とら）」の別称である「大虫」と縦に組み合わせると、「蚕」という漢字が得られるということである。この例が示すように、燈謎と謎語の区別は、単に文学的価値の高低というより、漢字の性質を利用していかどうかというところにこそあるとされている。謎語の答えとなる「蚕」は動物の名称だが、燈謎のほうの答えは、「蚕」という漢字そのものである。このような線引きによって、燈謎は漢字文化圏に特有な謎と認識され、世界中に見られる普遍なことば遊びである謎語（なぞなぞ）と一線を画したのである。

## 二 燈謎研究の現状と問題点

そもそも、なぜ燈謎と謎語を分けなければならなかったのか。少なくとも、『謎史』の中で銭南揚は、両者を「謎」と通称し、連綿とした民俗的事象のように叙述している。しかし、そのまえがきの中では、銭は両者の違いについてこう書いている。

中学時代、休みの日になると、よく先生や友人らと謎解きで遊んでいた。私は謎を作るのも当てるのも苦手だったが、それでも興味はあった。その後、唐・宋の人の筆記（筆記小説）でたくさん謎語を見かけて、ようやく謎語は長い歴史をもつものだと知った。しかし、古人の謎語といえは、

だいたい一尺ほどの長さで、上には節だらけ。両端はとても寒く、真ん中は非常に暑い（都来一尺長、上面都是節。両頭非常冷、中間非常熱）。

から「曆書（カレンダー）」と解答するものは、すなわち、いま民間で行うなぞなぞである。そのような謎語は、現在のいわゆる燈謎、たとえは、

我が家の隣に住む東家の娘はすでに三年間私を盗み見ている（臣東隣有女、窺臣已三年矣（先秦・宋玉『登徒子好色賦』より））。

から唐詩の一句「総て是玉関これぎよかんの情（唐・李白『子夜呉歌』からのこの一句を「すべては宋玉に関わる恋情によるもの」と解説すれば、謎面の意味とつながる）」を当てるものとは、全く違うものである。<sup>[19]</sup>

明らかに、銭南揚は燈謎の異質性に気付いていた。謎語との違いを説明する際に使われる「燈謎」は、もはや燈籠の周りに集まって謎解きを興じるイベントを指すのではなく、「文人の遊戯」としてさらに精緻化した文義謎の代名詞となっている。概念と用語が繁雑になってきたため、図式で整理してみよう。

繰り返しになるが、本書で扱う燈謎は主に、図6左下に位置する「燈謎（今体謎）」である。「今体」と呼ばれるこのスタイルの成立過程を遡ってみると、避けて通れないところに「謎話めいわ」というジャンルがある。謎話とは、謎人の活動状況や燈謎作品に対する評価、燈謎の創作理論などを主な内容とする文章で、清末・民国期の近代ジャーナリズムの発展とともに、様々な出版物に登場するようになった。燈謎を漢字文化の一分野として独立させる風潮

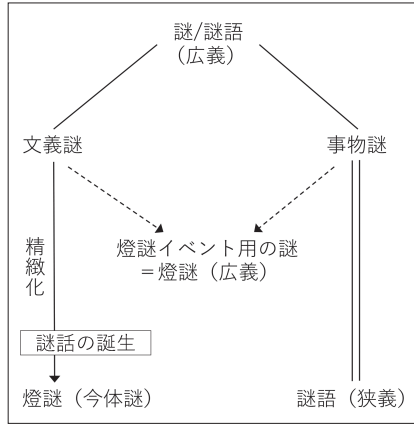


図6 燈謎に関する諸概念

は、清末から民国期にかけて書かれた多くの謎話によって創られたといっても過言ではない。謎話をとおして、近代の謎人がいかにそのアイデンティティーを得、どのように活動を展開し、交流していたか、燈謎に対する理解がどう変容してきたかを分析することが可能である。ゆえに、謎話は、燈謎作品と同じくらいに燈謎研究にとって不可欠な一次資料といえよう。

中国において、科挙制度が廃止された二年後の一九〇七年から、日中戦争が始まる一九三七年までの三〇年間、数多くの謎話が新聞・雑誌に掲載され、燈謎ブームに拍車をかけた。しかし、それ以降は戦乱や文化大革命、社会主義的文化政策などによって、中国大陸での燈謎の発展はしばらく「長い冬」に入ったようである。燈謎が再び大衆に迎えられたのは一九八〇年代ごろである。当時の文化論ブームを背景に、中国の各地で新しい謎社が結成され、愛好家の交流が一気に盛んになった。現在、大陸では、中華燈謎学会という全国的な燈謎愛好家団体があり、また、福建省漳州市を代表とする漳州地方では、燈謎芸術記念館が開設され、不定期に国際的な燈謎大会を開催している。謎人のコミュニケーションの輪は、清末・民国期に比べ、インターネットの発展によって更に広範囲に及んでいるが、活動のほとんどはアカデミズムから離れている。詳しくは各章で論述していくが、もっとも彼らの努力によって資料集や燈謎専門誌がいくつ出版されたものの、学術的研究は未だほとんど着手されておらず、先行研究が少ない状況が続いている。

海外で燈謎を取り上げた極く少数の研究の中では、リチャード・C・ルドルフ（一九〇九―二〇〇三）が一九四二年に発表した *Notes on the Riddle in China*<sup>[9]</sup> の参照価値が高い。この研究ノート自体は、中国に見られる事物謎・

文義謎および藏頭詩などの文字遊戯に関しておおまかな紹介しか行っていないが、時代的に民国末期に発表されたため、引用した参考文献には清末民初のものが多い。ノートでは中国語の文献のみならず、清末民初に外国人研究者が中国の「謎」について書いたものにも触れている。外国語による文献は量的にさほど多いとはいえないが、燈謎も当時において、シノロジ（中国学）の研究対象として取り上げられていた事実は興味深い。鈴木虎雄の「支那文学における語戯」や那波利貞（一八九〇—一九七〇）「元宵觀燈」など、日本人研究者の文章もルドルフのノートに取り挙げられている。その他、近藤奎（一八八四—一九六五）の『支那學藝大辭彙』では燈謎の二四種の「謎格（作謎に使われる特殊なルール）」について書かれていることも言及されている。「謎は中国でも古くからあり、広く知られているが、中国の人々は最近になるまであまり謎に関心を示さなかった。このような放置は、中国の学問の伝統が『俗』文学を低く評価していたことが一因であろう」とルドルフが述べているように、燈謎が近代になつてようやく独立した分野として見出されたのは、学問の伝統による「放置」とも深く関わっている。

ルドルフの指摘に触発され、本書は、清末・民国期の謎人が特に意識していた「書家（雅）・江湖（俗）の別」に注目した。謎集の序文や謎話を読んでとくに印象深かったのは、近代の謎人らが自分の創作に対し、明確な理念・主張を掲げていることである。たとえば、謎聖と呼ばれる張起南（一八七八—一九二四）は「橐園春燈話」の中で「作謎に関して、私は典雅な作風を主張する。なるべく謎底と謎面が天成のようにぴったり合うものを追求める。古人のいわゆる『玉製の器に玉製の蓋をかける』ような謎こそが秀作であり、謎面に成句を使うのはとくにいい（余作謎主張典雅一派、必底面天然配合、如古所謂玉合子蓋玉合子底者、乃為上品。面貴成語）」と書いている。また、薛鳳昌（一八七六—一九四四）の「邃漢齋謎話」にも「書家・江湖の別」についての議論が見られるが、「書家」「江湖」の分け方は光緒三四年（一九〇八）に創刊した雑誌『国学萃編』の燈謎投稿要項にある「書家的構想の謎のみ掲載し、江湖的な謎は掲載できないことをご寛恕ください（書家意者方能照登、江湖意者恕不登錄）」という注意書きから取っ

たものと考えられる。これらの主張が示しているように、謎人と自認した作者たちは自らの作品を俗っぽい謎語と一線を画する意欲がかなり強く、ゆえに儒家的教養をあまり反映しない「古体」を避け、作品の「書家意(文人らしさ)」をことごとく追い求めていった。しかし、「今体謎」を創作するための材料である儒家經典には限りがある。そのことに限界を感じはじめた彼らは、西洋伝来の学問を新たな沃土とみなし、積極的に作謎のインスピレーションを探し求めようとした。「今体」への執着は、学問の主流に寄り付こうとした姿勢とも理解できよう。

作者の主体性が先行して文体の変化を促したと思われるが、燈謎の場合は、おそらくそのような構図では捉えきれない部分が多い。それは、広義での「燈謎」が大衆に熟知されるようになった時代と、謎人が主体性を持つてもつばら今体謎を創作するようになった時代との間に、数百年もの時間差があるからである。さらにいえば、謎人の作家性よりも先に、燈謎の文体分化が現れていたからである。その数百年の間に何が起こったのか、「今体」「古体」という文体の差は何をきっかけに出現し、何を意味するのかについて、いままでの「謎史」または「燈謎史」においては全く説明されていない。「放置」される境遇を免れなくても、まだ欠落している部分が多く見受けられる。

ならば、この欠落をどう理解すべきか。まず、注意しなければならないのは、いわゆる「謎史／燈謎史」は近代に構築されたものだという点である。前文で紹介した中山大學民俗学会叢書の一つとして出版された『謎史』がその典型例である。燈謎を知るための基礎資料として広く知られているこの本の中では、先秦時代の隠語から清代の市語(市井で使われる隠語)まで、「謎」に関わる中国のことば遊び・文字遊びに幅広く言及し、時代順に並べるという作業が行われている。この作業は、『謎史』より一四年ほど早く刊行した「燈謎源流考」という文章の中にも見られる。すなわち、「謎」という漢字の語源から出発し、先秦の隠語、漢代の離合詩、唐宋筆記小説から見られる謎に関する記述、明清の燈謎という流れで書かれている。近年に出版された『中華燈謎史…先秦至民国』に至るまで、「謎史／燈謎史」と称されるものは基本的に同じ大筋を沿っている。これは、ほかの民国初期に量産される文

学史と同じく、進化史観という底流を共有している。つまり、自らが立っている「現在」を「近代」とし、語源というスタートラインからゴールとしての「近代」まで、その間を連ねる予定調和的なストーリーを描くということである。<sup>[2]</sup>

そのモデルによって生じる問題として、まず一つ挙げられるのは、「謎」以外のものを見ないという点である。「謎」の語源から敷衍し、なるべく多くの関連項目を取り入れたつもりでも、「謎」とそれが実際に載っている日常類書や新聞雑誌などの書誌媒体、筆記小説や章回小説などの文学ジャンルとの関係性を視野に入れていない。もう一つは、謎人不在の燈謎史になってしまふ点である。「謎史／燈謎史」の編纂者が掻き集めた謎の中には、名高い文士が作者とされるものも数多く存在する。しかし、その多くは筆記小説に記された逸聞の類にすぎず、事実の裏付けが取れない。そのような「伝○○作」の謎を喧伝する一方、清代以降の個人謎集に関しては、作者名が明記されているにもかかわらず、まるで集団によって創作された民間文学のように取り扱い、作者性に触れようとしない現象が起きている。その結果、「謎」という大きな括りに放り投げられた燈謎は、その性質と輪郭が曖昧なまま、文学と民俗学両方にとって周縁的なものとなってしまった。二一世紀の今になっても、この現状を脱却できないでいる。本書は、燈謎における「今体」「古体」の差を文体論的アプローチで紐解き、「書家」「江湖」の別を社会文化論の視座から考察することで、謎人という創作主体にスポットライトを当てたい。この燈謎という、いろいろな意味で狭間に位置する文字遊戯の諸相とおして、漢字文化の根底に潜んでいるエネルギーを描き出すことを目指す。

## 注

「1」 日本語に訳すと、「孔融いわく（外国の地名一つ当てよう）」となる。陳雨門編著『燈謎大観』第二輯、河南…中州書画社、一九八二年、八五頁。

- [2] 『図画日報』第百八十七号、上海：環球社、一九〇九年、七頁。
- [3] 鈴木虎雄「支那文学に於ける語戲」、同『支那文学研究』、東京：弘文堂書房、一九二五年一月、六五三―六五四頁。
- [4] 同六五三頁。「譚語」とは諧謔の語である。
- [5] 劉侗・于奕正『帝京景物略』（宋明清小品文集輯注一）、上海：上海遠東出版社、一九九六年一月、一一五頁。
- [6] 田汝成『西湖遊覽志余』（中国文学参考資料叢書）、北京：中華書局、一九五八年一月、卷二十一「熙朝樂事」、三五五頁。
- [7] 張岱『陶庵夢憶』（宋明清小品文集輯注一）、上海：上海遠東出版社、一九九六年一月、一六八頁。「四書」とは『論語』『孟子』と『礼記』中の「大学」「中庸」を言う。『千家詩』とは宋の劉克莊によって編纂された、村塾で童蒙の誦読に用いた詩の本。
- [8] 清末民初の謎話（燈謎批評）には「謎頭」「社家」などほかの言い方も見られるが、現在、台湾では有名な燈謎作家を「謎家」、燈謎創作に関わる愛好者を「謎友」と呼ぶのが一般的となっている。大陸では、有名な燈謎作家を「謎家」とし、一九九四年の「全国謎人アンケート」などのように、燈謎創作者を指す一般的な用語として「謎人」を使用している。本書は大陸の用語に準じて、主に「謎人」を使用する。
- [9] 銭南揚『謎史』、広州：国立中山大学語言歴史研究所、一九二八年七月、七九頁。
- [10] 同八五頁。
- [11] 同八九頁。
- [12] 『申報』（上海）一八七二年二月四日、第二面、署名「柳浦漁子」。
- [13] 文虎は燈謎の別称。梁紹壬『兩般秋雨盦隨筆』（明清筆記叢書、上海：上海古籍出版社、一九八二年八月）、八六頁、『清稗類鈔』「文学類二」の「謎の名称および原起」（徐珂編、上海：商務印書館、一九一七年一月）、第二九冊二〇二頁参照。
- [14] 「廋辞」「廋詞」は「隱語」「謎語」と同じ意味。『国語』晉語五に「秦客が宮廷で廋辞を述べ、大夫の中に応答できる者はいなかった（有秦客廋辞於朝、大夫莫之能対也）」とある（左丘明『国語』二十五別史五、濟南：齊魯書社、二〇〇五年一月、一九六頁を参考）。
- [15] 梁の宗懐撰『荆楚歲時記』の記載によると、藏鈞とは、参加者が二組に分かれ、お互い小石を手の中に掴み、その数を当て合う遊びである（宗懐『荆楚歲時記』、太原：山西人民出版社、一九八七年九月、六九頁）。射覆とは、『漢書』東方朔伝の記載によると、裏返された器の下に物を隠し、その名を当てる遊びである（班固『漢書』第九冊、北京：中華書局、一九六四年一月、

二八四四頁)。したがって、ここにおける「蔵鈎射覆の旨」とは隠されたものを当てるといった程度の意味である。

[16] 『申報』(上海) 一八七三年一月三日、第二面、署名「護花鈴館控仙史稿」。

[17] 「事物謎」「文義謎」の呼称は陸滋源『中華燈謎研究』(南京:江蘇科學技術出版社、一九八六年五月)など、燈謎作者や研究者の中で使われる補助的な概念であり、現代中国語における一般的な用語ではない。本稿は記述の便宜上、以下において文義謎のことを「燈謎」と称する。引用文の中では「謎」「謎語」「廋詞」「打虎」など異なる呼称となるが、特別に説明する箇所以外、基本文義謎のことを指す。

[18] 陸滋源編著『中華燈謎研究』、南京:江蘇科學技術出版社、一九八六年五月、五七頁。

[19] 錢南揚『謎史』、廣州:国立中山大学語言歷史研究所、一九二八年七月、「引子」一頁。

[20] Rudolph, Richard C. "Notes on the Riddle in China." *California Folklore Quarterly*, vol. 1, no. 1, 1942, pp. 65-82.

[21] 那波利貞『元宵觀燈』『歴史と地理』第一卷、史學地理學同友會編、東京:大鐘閣、一九一七年一月、六四八頁。

[22] 近藤奎『支那學藝大辭彙』、京都:立命館出版部、一九三六年二月、九五五頁。

[23] "Although riddles are both old and widely known in China, the Chinese have not paid much attention to them until recently. This neglect may be partly due to the fact that the Chinese scholastic tradition held 'vulgar' literature in low esteem." Rudolph, op. cit., p. 67.

[24] 張起南「橐園春燈話」『小説月報』第七卷第二号、上海:商務印書館、一九一六年二月、「雜俎」一〇頁。引用文中の「玉合子蓋玉合子底」とは、宋代の尤袤『全唐詩話』の中に記録されている唐代の詩人劉昭禹のことばであり、原文は「玉合子底、必有蓋、但精心求之、必獲其宝」とある。尤袤『全唐詩話』王雲五主編叢書集成初編、上海:商務印書館、一九三六年二月、六一頁。張起南が提唱するこの作風は、後に「南宗謎」とも呼ばれる。

[25] 徐珂編『清稗類鈔』第二九冊、上海:商務印書館、一九一七年一月、二〇四頁。

[26] 著者不明『燈謎源流考』、古今文芸叢書社編『古今文芸叢書第三集』、上海:広益書局、一九一四年四月。

[27] 内山精也が指摘した「中国近世文学史の問題点」を参考にした。内山精也「転回する南宋文学―宋代文学は『近世』文学か?―」『名古屋大學中國語學文學論集』二六、名古屋:名古屋大學中國文學研究室、二〇一三年二月、二頁。ちなみに、日本語の「近代(モダン)」は中国語において「現代」と訳されるが、本書では日本語に準じて「近代」とする。ただ、歴史的時代区分の用語としてではなく、主として自由な個人意識の自覚と主体形成という意味合いで「近代(モダン)」「近代性(モダニティ)」を用いた。